

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

43

18時40分。約束の時間までまだあと20分あるが、優子は早くも待ち合わせ場所の駅の南口まで来てしまっていた。

早く来てくれないかな…?

和樹さんひよつとしてお仕事長引いているのかな?

メールを打とうと思ったがせっかちな女だと思われるのは嫌だし、運転中の和樹に何かあつてはもつと嫌だ。

と考えていると、当の本人からメールが届いた。

「優子、お仕事終わった? 僕はもう出られるけど、どう?」

ひゃあ! 飛び上がりたい気持ちを抑えて、優子は返信した。

「大丈夫よ、もう南口で待つてる♡」

「OK!じゃ、あと10分以内に到着するね。」

わくわく、ソワソワ、浮き立つ心をなだめながら、優子は和樹が来るのを待った。通り過ぎるサラリーマンたちがチラチラと優子の方を眺めて行つたが、気にはしなかつた。

あの車かな?……違つた。

あれかな?……違う。

あゝ、もう、どれなの?和樹さんは?

とふくれつつらになりかけた瞬間。

来た!

銀色のレガシー「7573」がゆつくりと角を左折してきて、優子の前で止まった。

和樹が運転席から手を伸ばして、助手席のドアを開ける。

「和樹さん!」

そう言うと、優子は助手席に乗り込んだ。

「ごめんね、遅くなって、寒かったですよ?」

和樹が優子の頭をクシュクシュと撫でる。

優子はもうそれだけでとろけそうになつて、

「ううん、大丈夫よ、こんばんは、和樹さん、今日はありがとう。」と微笑んだ。

「もう、相変わらず、優子がかわいいなあ♡さ、行こうか?どこか行きたいところある?」

「ううん、特に決めてない。和樹さんにお任せするよ。」

「よしっ!じゃあ、入沢和樹、特別のドライブコースにお連れしよう!」

と言つて、和樹は静かに車を発進させた。

(続く)